京都市内の埋蔵文化財発掘調査速報　No.034（R５－１）

平安京跡（壬生坊城町）

調査期間：令和５年２月６日（月）～　４月４日（火）

調査機関：京都市　文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課

1 発掘調査について

今回の発掘調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）である「平安京跡」に該当します。この地点に事務所ビル新築工事が計画されたことから、遺跡への影響の有無を確認するための試掘調査を実施したところ、平安時代の遺跡が良好に遺存していることを確認しました。計画された建物建設工事によって、遺跡に影響が及ぶことを避けられなかったため、遺跡を記録として保存することとし、発掘調査を実施しました。調査は令和５年２月６日から４月４日まで実施し、調査面積は 310.8 ㎡です。

2 平安京跡について

平安京跡は、桓武天皇が延暦 13 年（794）に長岡京から遷都した都で、東西約 4.5km、南北約 5.2km の長方形を呈し、内部は碁盤の目状に区画されていました（条坊制）。各区画には規則に基づいて条、坊、町の数字が振られます。

今回は左京四条一坊五町の調査を実施しました。この町は現在の四条通と壬生川通の交差点北西に位置します。平安時代前期には光孝天皇の皇子である是忠親王の御所「南院」が存在したとされますが、以後の居住者については知られていません。調査地点は左京四条一坊五町の東端に位置し、調査区東端よりも少し東に平安京の壬生大路の西端（西築地心）があったと推定されています。また、かつて京都市電の壬生車庫があった一角にも位置します。壬生車庫廃止後には、一帯で発掘調査が行われており、平安時代後期を中心に多数の遺構が確認されています。今回はこの地点における土地利用の変遷について、より具体的な状況を明らかにすることを目指し、調査に臨みました。

3 今回の発掘調査成果

今回の発掘調査では、平安時代前期の土坑（＝穴）や、平安時代後期の井戸、柱列、溝などを確認しました。

平安時代前期の遺構は四角い土坑 SK76 で、中からは９世紀中ごろから後半にかけての土器が出土しています。是忠親王は天安元年（857）誕生なので、その活躍時期からは少しさかのぼる印象を受けます。今後、より詳細に遺物の時期を検討し、是忠親王の南院と関連するかどうかを確かめる必要がありますが、平安時代前期から土地利用が始まっていたことを発掘調査から裏付けることができました。一方で、平安時代中期の遺構・遺物は希薄であり、土地利用は低調になります。

遺構がもっとも増えるのは平安時代後期（12 世紀ごろ）で、この時期の井戸を４基確認しました。それぞれには少しずつ時期差があると思われますが、調査面積に対して井戸が多く、この一帯が活発に利用されていたことは確かです。なかでも調査区北西部で確認した SE64 は、その大きさが東西 2.7 m、南北 2.4 m で、木製の井戸枠だけで東西 1.3 m、南北 0.86 m という非常に大規模なものでした。井戸枠は半分に割って内側をくりぬいた丸太を２つ組み合わせたもので、これも珍しい構造です。同時期の遺物が出土した壬生大路西築地内溝と思われる南北溝も確認しました。以上の通り、平安時代後期に再開発される過程を追うことができましたが、その理由についてははっきりと分かっていません。今後、さらなる情報の蓄積で明らかにしていきたいと考えています。

（新田和央）

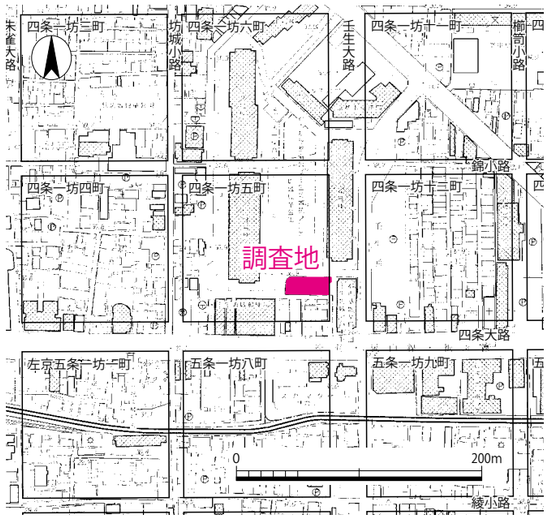

図１　調査地点位置図

図２　全景写真（２区２面東から）

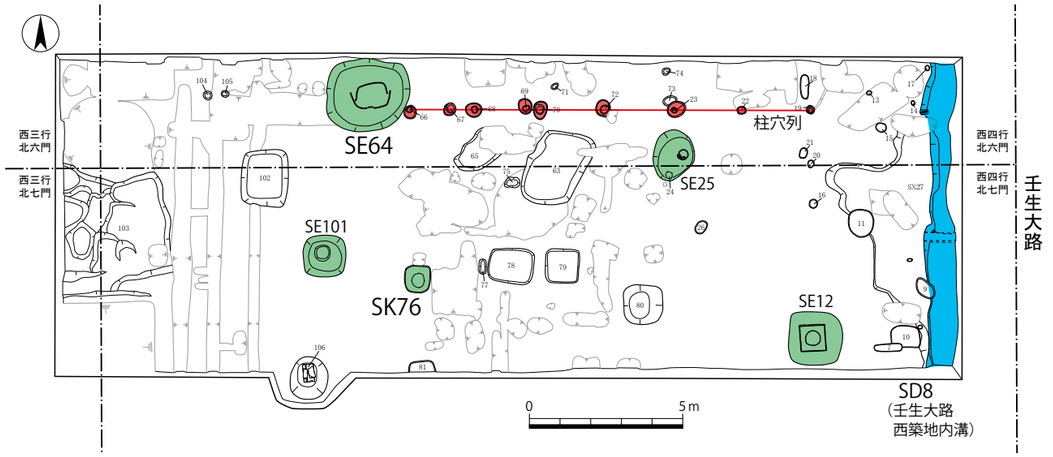

図３　調査区平面図（１：200）

図４　SK76 断面及び遺物出土状況（南から）

図５　SE64 完掘状況（南から）